

イベント「世界自然遺産と持続可能な発展」が発したメッセージ

著者	山田 誠
雑誌名	奄美ニューズレター
巻	30
ページ	41-45
別言語のタイトル	The significance of registration as a World Natural Heritage site and Sustainable Development
URL	http://hdl.handle.net/10232/17867

■特集：シンポジウム「世界自然遺産と持続可能な発展」

イベント「世界自然遺産と持続可能な発展」が発したメッセージ

山田 誠（鹿児島大学法文学部・
全学プロジェクト「奄美の『島』コスモス創出事業」代表）

1. 奄美の遺産登録と循環型社会づくりをめぐる動き

平成19年1月24日、奄美の地元紙は「奄美群島の世界自然遺産登録推進協議会」が23日に発足したことを伝えている。登録に向けて各種の取り組みを呼びかける事務局は、奄美群島広域事務組合に置かれる。また、早速とりかかる環境省への要請活動では、奄美が沖縄の陰に隠れてしまわないように、候補名称を「奄美・琉球」とすることを求めると報道されている。小笠原諸島が登録の暫定リストに載ったという全国ニュースを勘案したとき、奄美の登録推進は本格化の時期を迎えたのではなかろうか。

世界自然遺産登録に較べるとはるかに大きな社会コンセプトである循環型社会づくりに目を転じると、ここでも最近、私たちのプロジェクトの企図を元気づける動きが相次いでいる。誰の目にも分かるクリーン・エネルギーの風力発電が群島内のいくつかの島で相次いで建設される。私たちのメンバーである四宮明彦氏が精力的に推進している琉球アユの保存活動に関しても、住民の会が住用地域（役勝川）に続いて、宇検村（河内川）でも結成された。

私たちのプロジェクトのうちにあって話題性が高い事業は、バイオマス（私たちは、同一原料のから性質の異なる物質を次々に取り出す石油の精製に照応して、バイオリファイナリーと呼ぶことにしている）関連の事業である。代替ガソリンとして政府が重視しているエタノールは、サトウキビの製糖プロセスで発生する糖蜜から作られる。その製品化で

は、すでに沖縄が事業化の一步手前まで開発を進めているが、私たちはなんとか奄美色のある製法を編み出せないかと構想を練っている。また、黒糖焼酎の絞りカスはもうほとんど発酵しないそうである。けれども、廃棄物を有効活用する観点から、それを代替プラスチックとか建築塗料などの原料に生まれ変わらせる構想をもっている。これらの研究は、大学の研究室から飛び出して、現地に小さなプラントを配備して実験できないかという計画段階にある。これに対応するように、鹿児島や奄美で、原料となる排出物や製法技術への関心が高まっている（南日本新聞の平成19年1月1日号、南海日日新聞1月16日号を参照）。

地元の循環型社会づくりに対する関心や期待の高まりと、私たちのプロジェクトの準備プロセスが次第にかみ合っていく。その展開の中で、企画イベント「世界自然遺産と持続的な発展」が平成18年11月20日に奄美市で催された。

2. 企画イベントの狙いと論点

私たちのプロジェクトにとって、世界自然遺産の登録支援はいくつかある柱の1つである。それにもかかわらず、世界自然遺産をメインテーマにしたイベントを企画したのは、複合的な事業からなるプロジェクトは、それが多様な構成であればあるほど、全体の活動を象徴する拠り所が重要になるからである。そして、奄美に循環型社会をつくるプロジェクトの狙いを分かりやすくいえば、「世界自然遺産にふさわしい島づくり」にまとめるこ

とができる。この世界自然遺産を奄美の側からとらえてみよう。多くの住民にとって、奄美の魅力が世界的な水準であると認められるのは誇りであるが、その半面で、登録が奄美の発展にプラスとなるのかどうかについて押さえ難い不安・危惧が湧いてくる。この期待と不安が複雑に入り混じったテーマを一緒に考えてみるべく、メインテーマを設定した。



今回のイベントでは、鹿児島大学の研究者は主たる発言者になっていない。それは、この間に私たちが取り組んできた奄美への働きかけに対する限界認識に基づく側面と、今次プロジェクト・メンバーに、奄美をよく知らない研究者がかなり加わったという内部事情が重なり合った結果である。精力的に取り組んだ前回プロジェクトの反省点は、次のようなものである。プロジェクトの進め方としていくつもの新機軸があったにもかかわらず、奄美の人々が循環型社会への理解を目覚ましき深め、自ら動き出すほどに大きな共感を引き出したとは評価できない。私たちにない原因として取り出したのは、次のような点である。

- ・私たちの取り組みや研究成果を住民に直接訴えたり、提案する機会が少なすぎる。
- ・私たちの取り組みが住民自身の積極的な活動を誘発する性格になっていない。

この反省に基づいて、今後の取り組みは、次のような新機軸を打ち出すことにした。循

環型社会づくりの具体的な実験的研究を地元の人の見える場で試行する。また、当初から住民の方々と共働する態勢づくりを目指す。その第一段となる企画イベントでは、できるだけ多くの方々の参集する機会をもちたい。ここから、私たちと目ざす方向さえ重なっていれば、切り口や政策内容は違っていてもいい。いやむしろ、違っていているほうが面白いかも知れないと割り切って、著名人の力を借りるといったアイデアが生まれ、小野寺浩氏、養老孟司氏に登場を願ったというわけである。

今回のプロジェクト・メンバーは具体的な実験的研究や世界自然遺産の支援という柱の設定に照応して、理工系の研究者が多い。そのせいもあって、奄美の地にあまり足を踏み入れていないメンバーが少なくない。それらメンバーの立ち上げ式の意味合いもあるイベントにおいて、奄美の自然について詳しい方々から蓄積された知見を吸収しようと考えた。こうして、パネル討論「奄美社会からの声」が組まれた。当日の運営は、パネル討論「奄美社会からの声」、ゲスト対談「世界自然遺産と環境政策」の順序で行なわれた。

パネル討論においては、奄美の自然環境に詳しいパネリストと日常的に環境問題に取り組んでいるフロアの間で活発なやり取りが展開された。パネリストの発言は、行政による開発スタイル、経済的な自然の利活用と再生ぶり、住民の自己中心的な利用と遺産登録時代の行政の課題など、多角的な報告がなされた。フロアからは、廃棄物処理、ウミガメの産卵動向、さらには野生化したヤギによる被害まで、奄美の自然が抱える課題の多さについて提示があった。いずれも私たち外部の研究者が短期間観察しただけでは気付かない貴重な報告であり、まさに「奄美社会からの声」そのものであった。

ゲスト対談は世界自然遺産の政策に関しての第一人者と奄美と縁のある基礎医学の研究者に、登録候補地になっている奄美を念頭に

において対談してもらった。養老孟司氏が鎌倉市の世界遺産登録を推進する会の会長に就いていることは想定外であった。とはいえ、登録推進をめぐる奄美・鎌倉の事情対比により、はからずも奄美の推進態勢の実情が浮き彫りになったことは、一つの成果であろう。小野寺氏からは、登録をめぐる各地の動き、登録がもたらすインパクトが話された。養老氏の話は奄美の動物や虫の特徴にはじまり、石油枯渇後の都市・地方のサバイバル問題にまで及んだ。司会者が投げかけた論争的な問いかけには、豊富な話題と実務の裏付けで味付けされた巧みな反論が返ってきた。その当意即妙な答えぶりを脇におけば、奄美の世界自然遺産登録をプラスにするのもマイナスにするのも、実際に住んでいる住民の方々の暮らしと主体的な行動選択にかかっているという点で、ゲストの二人は一致している。

ゲスト対談の内容は、社会の条件を揺さぶるような政策変化がもたらす生活への作用、あるいは、奄美の登録を現代社会の在り方と結びつけて位置づけるという大きなテーマを扱っていた。さらに、引き起こされるであろう変化を奄美の人々はどう受けとめるのか。あるいは、その変化と真正面から向き合う覚悟はあるのかという問いかけが、フロアに投げかけられた。フロアからの発言は必ずしもゲストの提起した課題に的確に答えているようには見えない。しかしながら、困難ではあろうとも、事態を良くしていくためのいろいろな工夫を引き受けていく覚悟は読み取れたように思う。当日話された内容から、ゲスト対談が総論、パネル討論は各論と強引に整理して、『奄美ニューズレター』への掲載に際しては、ゲスト対談、パネル討論の順序にした。全体としてみた場合には、掲げたテーマの後半にあたる持続的な発展に関する論点整理が大きく抜け落ちたイベント内容になっている。

取り組みの進め方について触れておこう。

鹿児島大学が奄美全体をこれまで以上に教育研究フィールドの場として重視するという方針を打ち出していることもあり、今回、奄美群島広域事務組合に共催を依頼した。組合は快く受け入れて下さり、当日は組合の代表者である平田隆義・奄美市長から歓迎の挨拶があった。参加者は200名前後に達したが、この種の集まりの実情に詳しい人の発言によれば、ほぼいつも見いだせる顔ぶれであったとのことである。その点では、幅広く住民の方々を集めようとした意図は果たせなかったわけである。

3. 問われる鹿児島大学の役割

(i)

幅広い層の人々と結びつく機会という当初の意図からすれば、イベントは必ずしも目的を達成できなかったかもしれない。それでは、私たちは今回のイベントからどんなことを引き出せるのだろうか。まず私たちの現態勢を前提するかぎり、奄美では限定された役割しか果たせないことが分かった（うれしいことに、後日、地元の若い世代が開催した世界自然遺産登録を考える会には、若者を中心に250名ほどが集まったそうである。それぞれの層で多様な取り組みが活発に展開されれば、私たちは研究者にふさわしい役割に特化すればよい）。

ここでいう役割の限定は、私たちが呼びかける住民層の問題ではない。いま活動対象を世界自然遺産登録に限定した場合にも、私たちが自然環境の保全活動を全面的に展開することはできない。「奄美社会からの声」が具体的に指摘したように、地元の自然環境とのつき合い方は多面的で複雑である。公共工事や民間の経済的利用による自然破壊は以前から問題にされてきた。しかしながら、マングース、野良猫、野良犬による野生生物の駆逐。それどころか、山羊やザリガニまでが生態系を攪乱している。これらは、なによりも地元

の自発的な取り組みがベースになるであろうし、専門的な対応策はマングースバスターズなどの力を借りなければならない。とはいえ、分野によっては私たちが活動のイニシアティブをとる局面もあろう。たとえば、先に挙げた水産学部の四宮明彦氏らは、住民参加の保全活動を組織化している。しかしながら、こうした優れた事例も、現在の私たちにとっては例外に属するというのが率直な現状認識である。

奄美の山、海などで生態系の衰弱・攪乱が生じている基礎には、無批判的な都市生活の受容がある。不便な生活を改善し、より豊かな暮らしを実現するという押さえ難い生活欲求。だが、今はその欲求レベルを越えて浸透する都市的な生活スタイル。華やかさに彩られた路線は、これまでは追い求めるに値する夢に見えたとしても、今や長期的に維持不可能であることが、石油価格の高騰や温暖化による異常気象などさまざまな現象を通して次第に明らかにありつつある。この局面にあって、人工ガラスのごとき豊かさとは別種の豊かさに一番近い奄美が、破綻間近な都市路線を後追いすることは、奄美の魅力を手痛いほどに傷つけてしまう。世界自然遺産登録は、進行中のコースを方向転換させる契機になりうるのではないか。特別ゲストの主張を一言でまとめれば、こうなろう。この主張は鹿児島大学の研究グループも共有している。

それでは、転換を引き起こす条件、さらにその条件づくりと私たちの関わりはどうなるのだろうか。これに答えようとすれば、いくつもの側面が検討されなければならない。ここでは、「持続的な発展」を惹起する循環型社会の形成という私たちの目標と密接に絡み合う側面に限定して言及しよう。それを一言でいえば、イベントの中で十分に踏み込めなかった「持続的な発展」――現実の場面に引きつけていえば、奄美において不便な生活の改善やより豊かな生活を追求する具体的な見

取り図づくりと深く絡み合っている。

(ii)

都市型とは別種の豊かな生活についての私たちの見取り図はまだ試作段階にある。その性格を一言でいえば、その社会の実現にはハードな容器・施設もいくらか必要だが、重心はソフト面に置かれる。プログラムを分類すると、その取り組みは、大きく3つのタイプに分けられる。

まず、奄美が大規模な製造業を発展させる見込みは、近未来の範囲で考えるかぎり低い可能性しかない。そのため、生活を豊かにする経済的資源を得るためには、外からある程度の規模の訪問者を迎えなければならない。この点に関していえば、奄美の魅力を外に向かって発信していく仕組みとパワーがどうしても必要になる。これが第1のタイプである。このタイプの場合に、実は、一般論としていえば私たちにできることはあまりない。せいぜい、専門研究レベルに占める奄美の位置を情報として提供するくらいであろう。

ところが、外洋島嶼の奄美にとって、この自己の魅力を客観的につかむ機会、最新の奄美研究情報を収集する機会はほとんどない。もっといえば、島内にいながら発信できるだけの情報操作能力を学んだり、起業に必要な能力を身につける人材育成の場もない。ここに、高度な専門知識、最新の奄美研究を提供する教育機関として、鹿児島大学の独自の役割がある。鹿児島大学は、大学にふさわしい使命と位置づけて3年前に大学院のサテライト教室を開設した。しかるに、現実を見れば奄美大島での受講生数は伸び悩んでいる。この悩みを抱えながらも、私たちは、プロジェクトの柱として、隣の徳之島にサテライト教室の分室を設けるなど拡充の方向を打ち出している。

残りの2つは、域内の経済社会の在り方に変更を迫る活動である。その1つは、地元の

人々が着手している循環型社会づくりにふさわしい各種事業を一緒になって推進する、あるいは側面から支援するタイプである。具体例を挙げれば、奄美ミュージアム事業である。奄美群島全域をまるごと博物館に見立てて、地域の潜在的な宝を発掘する。それらの情報



を中核となる情報発信拠点が管理し、来島者の要望とマッチングさせる。現地にまで案内し、地元住民が講師役を務めるという事業内容である。この事業は、奄美群島広域事務組合がイニシアティブをとって、すでに動き来だしている。地元の講師役に学術的な知識の裏付けを提供するのは、大学研究者の専門的な仕事である。また、目下、申請の条件整備が進められている世界自然遺産登録についても、固有種の特性を解明して奄美の魅力をより高めるのは、大学研究者の本来の仕事である。研究推進と並行して、研究の成果を島に住む人々に広く伝え、その生態系をできるだけ維持発展させていく作業がある。私たちもこれらに取り組みが、この分野ではいろいろな団体が活動しており、それらの団体との協力・連携が大切になる。

最後の1つは、総合大学である鹿児島大学が実用化研究において力を試す事業である。このタイプにおいても、住民生活上の安全に関連したテーマとより経済活動に直結したテーマの二つに分けられる。私たちのプロジェクトは二つとも含めている。前者の例は、表流水や地下水の安全性の問題、サンゴ礁の

安全利用調査などである。これらの事業も、文系の通常の活動と較べれば規模が大きいものの、今回のプロジェクトが新しい段階への挑戦という性格になるのは、バイオリファイナリーを事業の柱に据えているためである。

この分野については、エタノール生産・事業運営、黒糖焼酎カスの代替プラスチック原料などへの転換を予定している。しかしながら、これらの事業の実施には、民間経済、自治体を中心とする各種団体の運営面における高度な協力が不可欠である。それゆえ、プロジェクトの活動はとてつもなく複雑になるが、その分、地域にとって事業のインパクトも大きい。この展開にあっては、「奄美社会からの声」の中で花井氏が指摘したように、階層ごとにそれぞれ会合を開いている事態は、否応なく変化が生じるのではないだろうか。欲張りな主催者は、本イベントの対話の中で私たちのプロジェクトの広がりやうまくひっかかる発言や質問が出ないだろうかと内心期待していた。特別対談におけるフロアー発言で、せつかく、「持続可能な発展」について質問が出ていたにもかかわらず、司会者は頭が真っ白になっていたために的確に答えていない。とても残念である。

司会者の巧拙とは別に、究極的に私たちが目指すのは、それぞれの立場にある人々が持続的に発展する奄美を生み出すべく協力する運営構造を築くことである。その中心に幅広い市民を結集するNPOがある場合には、先の運営構造はよりスムーズに形成されるように思われる。この点に関して率直に言えば、奄美の場合、NPO活動はまだ未成熟ではないかと、私は見てきた。しかしながら、先日、イベント参加者と会った際、その方はすでにさまざまな分野の方々を巻き込んだNPOづくりの構想を暖めていた。今回のイベントが発したメッセージは、奄美にしっかり受けとめられたと実感している。